

随 想

“生命”についての一所見

米 田 豊

一定の“つくり”のもと、一定の“きまり”に従って、整然と動き続ける現象を、生命と言いたい。細胞ばかり、植物も動物もしかり。

この考えで推し進めると、地球も、太陽も銀河系も、生命をもったものと考えられる。

私の体の“つくり”を誰れが、どのようにして造ったのか？ 私の力では分からない。

人の体の大腸内で生活している大腸菌が、人の体の“つくり”や、“はたらき”が分からないように。

小さな細胞の生命体、それを造り、動かすもとなるDNA。それが、複雑化し、35億余年の歳月を重ねて進化し、最高の傑作として、ホモ・サピエンスがつくられた。

その力の源は？ 人の力で推し量ることが出来ない大きな力の存在を認めざるを得ない。

その実態の分らない大きな力の解明に、いどむのが科学である。が、現在、その一部しか明らかにされていない。その事実を、まず認め、自然界には、謙虚な態度で臨む必要がある。

視界の狭い人の感覚のみで、万事を解決し、そのみに頼る生活は、自から狭い世界に、閉じこもることになる。

私は、今、広い大きな世界、宇宙を動かしている、大きな力を信じ、その大きな力の支配下において生かされていることを信じ、感謝しながら、毎日楽しく、暮しております。

随 想

人の情さに感激の一年

坂 下 栄 作

八十才を過ぎ 老化でボケ 難聴も進行して、そこはかたく寂しい思いをしているこのごろ

① 東洋大学の野正男教授から書留で、重い書籍小包が届きました。先生が現在企画して居られる生物の文献目録の見本が多数入っていて驚きました。

先生と私は未知の間柄だと思って居りましたが、曰く 先生の御名前は、昭和十年代に発表された温泉中に 息する生物に就いて という論文を初め多数所持して居り、よく存じ上げておりますに初まり…………… 当時旧制富山高校の学生の同志が発行した、博物同好会誌の1号、2号、3号、5号を所持して居られたらCopyしたいので拝借できないかという依頼です。そこで早速、植木忠夫先生に御願したら、3号、4号を提供して下さいだったので、3号をコピーして御送りしました(6月6日)。

② 鶴見大学の後藤仁敏教授から、歯の専門分野の権威者十二人の協力による、歯の比較解剖学という大冊の著書が謹呈として届きました。私が動物の歯の勉強をはじめた昭和42年頃から御指導して頂いた先生なので存じ上げていますが、私の如き者にとすると感激の至りです。(7月5日)。

③ 8月3日 午後九時前後 大宮駅で詐欺に会い、一万五千元を取られる醜態を演じました。これは北日本新聞の十月九日 読者コーナーでも記され、これを読んだ未知の県内婦人から、私も同じ被害を受けました。この種の詐欺があるのだと、一般の人が知っていたら、被害を受けなくなるでしょう。よく書いて下さったと感謝の電話を受けて驚いて居ます。(とやまの生涯学習 随想…… だまされ叱られの巻 No.58)。

④ 歯の臨床専門誌 Dental Diamond社、ジーシーサークル編集部から29日に来訪するからよろしくとの電話があった。私は名もなく地位もない、歯の勉強はしているが、それは誰でも知っていると思われる基礎的な勉強です。

大学や専門の研究所では、時代の先端を行く魅力的な研究をしているのに、私を尋ねるとは不思議でたまりません。(11月18日電話)

29日午後、一時半から三時半まで歯を持っている動物に就いて。久高利恵、武南恩、と写真師の三人と対談、録音、撮影をして帰りました。

その際、昭和57年3月に来宅し、その記録を六月号(Dental Diamond vol.7 No.6)に登載してあったのを持って来てくれました。その時の内容は、魚の歯と人の歯であって、津加奈子フリーライターとの対談、うめだゆきなりのイラストや写真が、65頁から71頁に記されており、ほんとうに懐かしく夢のように読み返して居ます。

⑤ 朝鮮の大丘工業専門大学の学長 李慶熙さんより丁寧な年賀状が送られてきました。全く未知の人です。(12月26日)。

⑥ その他、各都道府県で印刷した特別な研究図書などの案内が、書店からではなく、当局から送られて来ます。どうして私を知っているのか、不思議で堪りません。

以上のような暖かい人々の思いやりが続いているので、豊かな心情が保持され、そのために老いゆく寂しさも感ぜず、それが現在の健康の基盤をなしているのだろうと感謝の毎日です。

### 富山県生物学会誌研究発表投稿規定

これにつきましては、従前より予算の都合もあって1人6頁以内とし、オーバーした分につきましては、超過分をいただいていたしましたが、ここに明示しておきます。

#### 内 容

- 学会誌にふさわしい学術研究的なもの。
- 新しい知見の紹介や報告。
- 生態以外の内容も歓迎。
- 校正のとき大巾訂正のないよく推稿された原稿。

#### 形 式

- 大学誌用原稿用紙6枚以内(図、写真を含み、図・写真がある場合はその位置と大きさを明示すること)
- 超過した分については1ページにつき3000円を支払うこと。
- 別刷についても実費必要です。

### 富山市で発見されたホクリクサンショウウオ *Hynobius takedai*

富山市科学文化センター 南部 久 男

#### はじめに

1970年代から1980年代初めにかけて、石川県能登地方及び富山県富山市の丘陵地帯で、サンショウウオ科(Hynobidae), *Hynobius* 属に属すると考えられる透明で紐状の卵囊を持つサンショウウオが相次いで発見された(宮崎, 1977, 1978; 南部, 1982)。このサンショウウオは、従来、北陸地方に生息していたクロサンショウウオ *Hynobius nigrescens*, ヒダサンショウウオ *H. kimurae*, ハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* の三種とは成体及び卵囊の形態で明らかに区別された。石川県のサンショウウオは1971年4月10日に当時羽咋市立越路野小学校校長竹田俊雄氏によって同校運動場の側溝で成体3個体、卵塊5個が発見されたのが最初で、当時トウホクサンショウウオ *H. lichenatus* と考えられたが(宮崎光二氏私信), その後京都府の丹後地方に局在するアベサンショウウオ *H. abei* と同定された(宮崎, 1977, 1978)。さらに、1984年には第一発見者の竹田俊雄氏ちなみ、日本の新種のサンショウウオ、ホクリクサンショウウオ *Hynobius takedai* として記載された(Matsui & Miyazaki, 1984)。新種として記載されたのが最近のことであり、形態や、分布、生態に関する知見は非常に少ない。筆者は富山市で発見したサンショウウオの成体及び卵囊の形態を能登地方のホクリクサンショウウオと比較した結果、両者の形態は極めて類似しており、ホクリクサンショウウオと同定した。この結果や富山市産ホクリクサンショウウオの産卵期、産卵状況、幼生期間等については既に報告した(Nambu, 1982, 1986)。今回これらの概要について述べる。

#### 富山市産ホクリクサンショウウオの形態及び生態

##### 1) 成 体

富山市産ホクリクサンショウウオのオスの頭胴長の平均は53.7mm, 最小値は44.0mm, 最大値は61.4mmである(N=20)。以下、実測値(単位mm)は平均値(観察個体数(N), 最小値-最大値), 割合(%)は中央値(観察個体数(N), 最小値-最大値)と表す。メスでは52.5mm(N=7, 45.7-58.9)である。原記載(Matsui & Miyazaki, 1984)ではオスは(N=24, 45.6-66.8), メスでは57.8mm(N=7, 53.5-66.8mm)である。

尾長はオスでは42.8mm(N=20, 31.0-55.9)であり、胴長の40.9mm(N=20, 33.4-47.8)よりやや大きい。メスでは36.7mm(N=7, 29.8-43.9mm)で、40.2mm(N=7, 35.2-45.5)よりやや小さい。頭胴長に対する尾長の割合(%)は、オスでは80.1%(N=20, 66.1-92.2)メスでは68.5%(N=7, 64.5-78.1)である。